

『小右記』における病氣・怪我に関する表現

清水 教子

一 はじめに

平安中期の記録語文献の一つ、公卿藤原実資（957年～1046年）の書いた日記『小右記』（982年正月から1032年12月までの記事が現存。以下、本文献と呼ぶことにする。）では、病氣・怪我に関する表現はどのように記されているのか。特に、一文中での主語と述語、連用修飾語と述語、などに用いられている単語に注目しながら、注意すべき表現の類型を探ってみる。これが本稿の目的である。

将来の目標は、本文献と同時期の他の記録語文献、藤原道長（966年～1027年）の『御堂関白記』（998年から1021年までの記事が現存。）や藤原行成（972年～1027年）の『権記』（991年から1011年までの記事が現存。）において、本文献と同様の方法で調査することにより、平安中期の記録語文献に見られる『病氣・怪我に関する表現』に共通する表現の類型と、三者間の個性差による表現の違いとを考察することである。

なお、本稿の作業には、『小右記一』『小右記二』『小右記三』（いずれも1973年臨川書店発行）の三冊を用いた。以下の具体例の引用は、例えば、1027年11月21日の記事「亦背腫物発動」（『小右記三』P149）の場合、紙幅の都合上（三P149）とのみ記すことにする。

二 病氣・怪我に関する表現の実態

病氣・怪我に関する表現の実態では、どんな単語が用いられているかをを中心に考察する。その際、記録語文献のように原則として漢字のみで表記されている場合、その単語の読み方を認定することはさほど容易ではない。特に、和語か字音語かの認定には迷うものが多い。その認定の根拠としては、鎌倉時代書写の『色葉字類抄』（1964年風間書房刊）及び『観智院本類聚名義抄』（1970年風間書房刊）を参考にしたが、未解決の単語もある。

以下、異なり語に注目して、その使用状況を記述する。

1 名詞（相当語）を中心に

病氣・怪我に関する名詞（相当語）は、和語として、瘡^{かさ}・風^{かせ}・疵^{きず}・心地^{こころ}・咳^{せき}・病^{しほみやみ}・

らかぬ つつか なやましけ なやみ はれもの やまひ わつらひ わらはやみ いたはるところ いたはところ なやとところ
 近目・恙・惱氣・惱・腫物・病・煩・癰病・所・勞・所・痛・所・惱・
 わつらふところ
 所・煩（以下省略）など52語、字音語として、エキ エキレイ オンシキ タツク タウ克蘭
 シキモツ シキヤウ シヤケ シヤリヤウ シンジン シンラウ スハタ サ ネツ フビヤク フロ フレイ リンヤウ
 食物・時行・邪氣・邪靈・心神・心勞・寸白・痔・熱・風病・不予・不例・痢病

（以下省略）など57語、併せて109語である。

上記の語の内、用例数の比較的多いものの中から次の9語——病（176例）・惱（50例）・心地（35例）・疵（23例）・邪氣（43例）・心神（38例）・風病（34例）・痢病（21例）・飲食（12例）——を取り上げる。

一文の表現は、どんな名詞（相当語）がどんな動詞（相当語）や形容詞（相当語）などと一緒に用いられているかによって決まるので、以下それについて説明する。

①病は、「忽煩胸病 不參御前」（一P36）のように煩^{わづらふ} 15例、「称病不參」（一P18）のように称^{ショウ} 12例、「左衛門督病重由云々」（二P214）のように重^{おもし} 10例、「雅通依胸病発動未可參」（二P79）のように発動^{ハツドウ} 6例、「申云 有身病」（二P78）のように有^{あり} 5例といった具合である。②惱は、「宮御惱直由承案内」（一P153）のように宜^{よろし} 6例、「御惱尚不快」（一P154）のように不^ふ 快^{かい} 3例、「宮御惱 去夜極重由 早朝有告」（一P158）のように重^{おもし} 3例、「御惱似重病発御」（一P152）のように似^に 3例といった具合である。③心地は、「今日御心地頗宜云々」（二P184）のように宜^{よろし} 3例、「御心地不宜之時事也者」（二P249）のように不^ふ 宜^{よろし} 3例、「御心地尚不快」（二P357）のように不^ふ 快^{かい} 2例という具合である。④疵は、「面疵未復尋常」（二P375）のように未復^{フクサス} 1例、「日々所勞疵平愈」（二P375）のように平愈^{ヘイユ} 1例などである。⑤邪氣は、「御邪氣能被調伏者」（一P443）のように調伏^{テウフツ} 4例、「日夜為邪氣被取入」（三P68）のように取入^{トリイル} 3例、「時行邪氣相交者」（二P39）のように相交^{アヒマシル} 3例、「初是時行 後似邪氣」（一P440）のように似^に 3例、「邪氣駢移一両女人之後 頗宜御坐者」（一P157）のように駢移^{カヘウツル} 2例などである。⑥心神は、「依心神不宜 不相逢」（三P195）のように不^ふ 宜^{よろし} 21例、「従午時許心神極惱」（一P62）のように惱^{なやまし} 15例、「心神不覚 腰亦不動」（三P170）のように不覚^{フカス} 9例、「心神復例」（二P99）のように復^{フクサス} 4例、「依心神難堪 不向祿所」（二P298）のように難堪^{ナヘカナシ} 3例などである。⑦風病は、「宰相従一昨夕風病発動」（二P345）のように発動^{ハツドウ} 14例、「今日依風病発不參」（三P229）のように発^{おこる} 5例、「摂政被勞風病」（二P73）のように勞^{いたはる} 3例などである。⑧痢病は、「従曉更痢病発動」（三P87）のように発動^{ハツドウ} 6例、「昨日俄勞痢病」（二P371）のように勞^{いたはる} 4例、「従夜部重煩痢病」（三P66）のように煩^{わづらふ} 3例などである。⑨飲食は、「日来不受飲食」（二P214）のように不受^{うけず} 7例、「飲食不入口」（三P153）のように不入^{いれず} 1例、「飲食已絶」（三P149）のように絶^{たぬ} 1例などである。

以上から、⑦風病や⑧痢病は発動と、⑨飲食は不受とよく一緒に用いられていると言える。

2 動詞（相当語）を中心に

病氣・怪我に関する動詞（相当語）は、和語として、喘・^{あへく}勞・^{いたはる}痛・^{いたむ}愈・^{うつ}打・^{うめく}吟・^{おこる}発・^{くるしむ}苦・^{くるめく}眩・^{そこなふ}損・^{ちる}散・^{つかる}疲・^{なやむ}悩・^{はる}腫・^{やす}臥・^{やむ}病・^{わづらふ}煩（以下省略）など74語、字音語（漢語サ変動詞も含める）として、^{カンラン}眩転・^{カンヘイ}減平・^{ハツキョ}発起・^{ハツトウ}発動・^{フクツ}不調・^{ヘイフク}平復・^{ヘイユ}平愈（以下省略）・^{クフス}屈・^{ケンズ}減・^{シヤツ}瀉・^{シエツ}称・^{ソンズ}存・^{フクツ}復（以下省略）など29語、併せて103語である。

上記の内、用例数の比較的多いものの中から次の9語——^{なやむ}悩（126例）・^{いたはる}勞（239例）・^{おこる}発（62例）・^{わづらふ}煩（77例）・^{ヘイフク}平復（44例）・^{ハツトウ}発動（30例）・^{ヘイユ}平愈（15例）・^{シエツ}称（31例）・^{ケンズ}減（30例）——を取り上げる。

①悩は、何を悩むかという対象を表記上明記している場合が少なく、「斎王此一兩日悩給御」（一P256）のように^は齒2例、「大殿自夜間重悩給御」（二P180）のように^{むね}胸2例、「皇太后宮日来悩給寸白」（一P262）のように^{スハク}寸白などである。②勞は、「左相府被勞足不被參入」（一P457）のように^{あし}足3例、「是御腰重勞給也」（三P256）のように^{こし}腰3例、「昨日俄勞痢病」（二P371）のように^{けつ}痢病3例などである。③発は、「御風病発御云々」（一P285）のように^{フビヤウ}風病5例、「只痢病許発給之由」（一P277）のように^{わらはやみ}瘡病4例、「祇園熱発不被聽聞」（三P50）のように^{ねつ}熱4例などである。④煩は、「式部卿官室從去七日重煩胸病」（三P38）のように^{むねのやまひ}胸病10例、「左衛門督女兒日来煩時行」（二P94）のように^{シヤウ}時行3例、「從夜部重煩痢病」（三P66）のように^{リヒヤウ}痢病3例などである。⑤平復は、「又病已平復云々」（一P424）のように^{やまひ}病4例、「御胸平復」（二P181）のように^{むね}胸3例などを主語としている。⑥発動は既に前記1で述べたように、^{フビヤウ}風病14例・^{リヒヤウ}痢病6例などを主語としている。⑦平愈は、「病忽不可平愈」（一P169）のように^{やまひ}病1例、「而所勞未平愈之間 不能定申」（二P335）のように^{いたはるところ}所勞1例、「日来煩赤班瘡平愈」（三P62）のように^{かさ}瘡1例などである。⑧称は、「仍称所勞退出」（一P181）のように^{やまひ}所勞18例、「称病退出」（三P68）のように^{やまひ}病7例、「今日俄称所煩 再三仰遣」（三P135）のように^{わづらふところ}所煩1例などである。⑨減は、「所勞且十分之七八減者」（一P351）のように^{やまひ}目3例、「所勞今日煩減者」（二P371）のように^{いたはるところ}所勞1例、「少將所悩未減」（三P66）のように^{なやむところ}所悩1例、「少將所悩未減者」（二P357）のように^{わづらふところ}所煩1例などが主語である。

3 形容詞（相当語）を中心に

病氣・怪我に関する形容詞（相当語）は、^{あかし}赤・^{あかし}明・^{あつし}熱・^{あまねし}遍・^{あやふし}危・^{いたし}痛・^{おもし}重・

かるし ぐらし くるし こころよし たかし つつかなし なやまし やすからず よろし たへかたし
 軽・暗・苦・快・高・無恙・愠・不安・宜・難堪（以下省略）など23
 語である。上記の内、重（108例）・難堪（21例）・熱（17例）・不快（18例）の4語を
 取り上げる。

①重は、「重尹朝臣申母病重由」（一P420）のように病^{なやみ}19例、「去夜宮御愠重発給由」（一P154）のように愠^{なやみ}8例、「御胸重発給」（二P191）のように胸^{むね}2例、「大殿御心地猶重」（二P197）のように心地^{こころち}2例などが主語である。③熱は、「身熱心神不宜」（二P95）のように17例中16例までが身^みを主語としている。④不快は、「主上御目猶不快歟」（一P424）のように目^め7例、「覚給後御心地猶不快者」（一P286）のように心地^{こころち}4例、「皇太后御愠猶不快御」（三P135）のように愠^{なやみ}3例、「所^{いたはるところ}勞^{らう}猶未不快之故也」（三P158）のように所^{いたはるところ}3例などである。

以上から、③熱は身との結合が多く用いられていると言える。

4 形容動詞（相当語）を中心に

病氣・怪我に関する形容動詞（相当語）は、和語が不^{あきらかならず}審^{おたやかならず}・不^{あきらかならず}穩^{おたやかならず}の2語、字音語が危急^{キキフ}・急^{キフ}・枯槁^{コガウ}・昏黒^{コンコク}・至急^{シキフ}・尋常^{シンジャウ}・憔悴^{セウスイ}・微^ヒ・非常^{ヒシヤウ}・不覚^{フカク}・不便^{フヘン}・尪弱^{ワウジャク}の12語併せて14語である。上記の内、不^{あきらかならず}審^{おたやかならず}（2例）・不^{あきらかならず}穩^{おたやかならず}（2例）・枯槁^{コガウ}（7例）・不覚^{フカク}（37例）の4語を取り上げる。

①不審は、「御目事案内、一両蔵人云 昨今弥御不審」（一P420）「今日御目不如昨日猶不審御也」（一P443）のように、2例共に目に關して用いられている。②不穩は、「相府足雖平復 行歩不穩」（二P10）「須進御所令奏 而行歩不穩」（三P281）のように、2例共に行歩^{キウフフ}が主語である。③枯槁は、「而枯槁身体未如尋常」（二P99）「被痛煩 有枯槁之氣者」（一P457）のように、身体や氣を修飾している。④不覚は、「如此之間心神不覚御坐者」（三P71）のように御坐^{おはします}2例、「通夜不覚愠給 今間令休息」（二P180）のように愠^{なやみ}5例、「去朔日按察行成俄不覚煩 飲食不入口 太重煩者」（三P153）のように煩^{わづらふ}2例などを修飾している。

以上から、不^{あきらかならず}審^{おたやかならず}は目と、不^{あきらかならず}穩^{おたやかならず}は行歩と、不覚^{キウフフ}は愠^{フカク}と、それぞれよく一緒に用いられていると言える。

三 注意される表現の類型

前記二では、主語と述語、目的語と述語、修飾語と被修飾語などのそれぞれの関係において、どんな単語が一緒に用いられているかについて考察した。ここでは、病氣・怪我に關して同じような意味を示す表現の場合に、どんな類型が用いられているかに注目してみる。

本文献では、(1)病気が生じるという意味の場合は、^{おこる}発 62例・^{ハツトウ}発動 30例・^{ハツキ}発起 1例の 3 語、(2)病気であるという意味の場合は、^{いたはる}労 239例・^{なやむ}悩 156例・^{わづらふ}煩 77例・^{やし}病 4例・^{やまひあり}有病 5例・^{つつかり}有恙 4例の 6 種類、(3)病気が回復するという意味の場合は、^{へい}平復 44例・^{フクサ}復 37例・^{ヘイサ}平 16例・^{ヘイユ}平愈 15例・^{ケンヘイ}減平 6例・^{ヘイケン}平損 5例・^{ヘイケン}平減 3例・^{メンサ}減 2例の 8 語、がそれぞれ用いられている。又、(4)普通すなわち病気でない状態を示す場合は、^{リンシヤウ}尋常 16例・^{レイ}例 24例・^{ヘイセイ}平生 1例・^{つねのさ}常袋 1例の 4 種類が用いられている。

この四群について、以下に表現の類型を考察する。

1 病気が生じるという意味の場合

^{おこる}発・^{ハツトウ}発動・^{ハツキ}発起は、その主語に注目すると、^{フヒヤウ}風病・^{かせ}風・^{リヒヤウ}痢病・^{わらはやみ}瘧病・^{しほみやみ}咳病・^{エキレイ}疫癘・^シ痔・^{セキリ}赤痢・^{なやみ}腫物・^{はれもの}熱・^{ナツ}腰痛・^{こしのやまひ}胸病・^{むねのやまひ}所労・^{いたはるところ}所痛などである。

三つの動詞（相当語）にできる限り共通して用いられている主語を選んで具体例を調べてみると、①発は、「日来風病時々発動 今日弥発不可参之由」（三 P 45）「春宮大夫腫物更発」（三 P 124）、②発動は、「内府俄被申風病発動之由」（三 P 234）「亦背腫物発動 不受医療」（三 P 149）、③発起は、「近日赤痢瘧病共以発起」（二 P 10）などであり、三者間に使用上の差異は認められない。従って、本文献の記者藤原実資は、①発62例②発動30例③発起1例の順に、つまり、和語の動詞発を最も好んで用いたと考えられる。

なお、発に引用した具体例の中で、発動と発の両方を用いているのは、同一語の繰り返しを避けたものと考えられる。

2 病気であるという意味の場合

体のどこ（部位）が病気であるのか、又は、どんな病気であるのかを調べてみると、^{あし}足・^{おもて}面・^{こし}腰・^は歯・^{ほら}腹・^{むね}胸・^{クワクワン}霍乱・^{かさ}瘡・^{シエキ}時疫・^{シキヤウ}時行・^{セキリ}赤痢・^{ネフのもの}熱物・^{はれもの}腫物・^{フヒヤウ}風病・^{むねのやまひ}胸病・^{わらはやみ}瘧病などである。前記 1 と同様に、6 種類の動詞（相当語）にできる限り共通して用いられている語を選んで具体例を比較してみる。

①^{いたはる}労は、「資平云 主上勞御々腹」（二 P 101）「資頼云 主上御悩令平復給 赤班瘡只五ヶ日許令勞給者」（三 P 65）、②^{なやむ}悩は、「主上悩御赤班瘡云々」（三 P 63）、③^{わづらふ}煩は、「母氏今日俄煩腹二三度」（三 P 265）「中納言室家重煩赤班瘡」（三 P 68）、④^や病は「資房病腹無極 去夜痢廿余度」（三 P 66）、⑤^{やまひあり}有病は「或有身病不可参入」（二 P 410）、⑥^{つつかり}有恙は「参入障事思慮多端 老人有恙所憚無極」（二 P 383）のように用いられており、⑤⑥を除いて残り四つの動詞の間には使用上の差異が認められない。①労②悩③煩④病の四つの動詞が目的語を取るのに対し、⑤有病⑥有恙はどこにという補語を要求するもので

ある。

又、本文献の記者は、①勞239例②惱156例③煩77例④病4例の順に、つまり、勞を最も好んで用いたと考えられる。

次に、勞・惱・煩の三つの動詞に共通して見られる表現の類型は、①勞が「使申云 扶公出立之間 前日所勞瘡更發」(三P 56)「相扶所勞必可參入」(一P 158)のように^{いたはるところ}所勞79例、②惱が「和尚所惱從昨弥重」(二P 282)のように^{なやむところ}所惱30例、③煩が「彼殿御消息 從去夜所煩難堪者」(二P 174)のように^{わづらふところ}所煩23例などに用いられている「所～」(～するところ)という形であり、これ全体で名詞に相当する。

又、他の類型は、①勞が「報云 足下有所勞 今明不可參入」(三P 74)のように^{いたはるところあり}有所勞131例、②惱が「或云 源宰相日来有所惱 於三井寺修善云々」(二P 6)のように有所惱4例、③煩が「左大将教通俄有所煩退出」(二P 227)のように^{わづらふところあり}有所煩14例などに用いられている「有所～」(～するところあり)という表現である。

3 病氣が回復するという意味の場合

^{ヘイフク}平復・^{フクサ}復・^{ヘイサ}平・^{ヘイユ}平愈・^{ケンヘイ}減平・^{ヘイソン}平損・^{ヘイケン}平減・^{メフス}滅の8語は、その主語に注目すると、^{あし}足・^め目・^{むね}胸・^{こころ}心地・^{シンシン}心神・^{シキ}食・^{なやみ}悩・^{やまひ}病・^{ます}疵・^{かさ}瘡・^{ネツノケ}熱氣・^{フヒヤク}風病・^{リヒヤク}痢病・^{いたはるところ}所勞・^{なやむところ}所惱などである。この8語にできる限り共通する主語を取っている具体例を引用すると、①平復は「所勞漸以平復 而時々心神不宜」(一P 284)「入夜資平来云 左將軍病已平復」(二P 139)、②復は「余報云 所勞猶下復例」(二P 383)「面疵未復尋常 逢人多憚耳」(二P 375)、③平は「申所勞未平之由」(一P 153)、④平愈は「而所勞未平愈之間 不能定申」(二P 335)「日々所勞疵平愈」(二P 375)、⑤減平は「近江守朝臣日者病惱 自昨夕似減平者」(一P 176)「右大臣日来被勞痢病減平之間 從一昨日身熱惱苦云々」(二P 105)、⑥平損は「重尹朝臣申母病重由 平損期可難知」(一P 420)「徑經所勞痢病 未平損」(三P 136)、⑦平減は「余所勞漸以平減 面疵今三四分許未滿」(二P 377)、⑧滅は「宰相云 資房今日服韭 似有驗 所勞頗減者」(三P 67)「宰相来云 資房已有滅氣 少許食 熱氣滅」(二P 361)などである。

以上から、②復はその後ろに^{レイニ}例とか^{シンシヤウニ}尋常とかの補語を併せている点に違いがあるが、その他の七つの語には使用上の差異が認められない。

次に、平復・平・平愈・平減の四つの語に共通して見られる表現の類型は、①平復が「臨未剋有平復給之氣 然而猶令惱給」(一P 286)、③平は「今日大駝白地渡塵土御門御心地有平氣歟」(二P 198)、④平愈は「婦来云 昨日以後有平愈氣者」(一P 282)、⑦平減は「式光今日有平滅氣」(二P 390)などのように、「有～氣」(～するケあり)である。

氣とは様子の意味である。

その他、平復^{ヘイフク}と平愈^{ヘイユ}の二つの語に共通して見られる表現の類型は、①平復が「仍退出是熱発也 今夜着薄衣臥筵上 得平復者」(二P232)、④平愈が「人々云 近日時疫漸以無音 希有悩者 不過三日五日 得平愈云々」(二P3)のように、「得〜」(〜すること、をう)である。

4 普通すなわち病気でない状態を示す場合

尋常^{シンシヤウ}・例^{レイ}・平生^{ヘイセイ}・常儀^{ツネノキ}は、何が普通すなわち病気でない状態を示しているかを調べると、心地^{ココチ}・疵^{とす}・目^め・病^{やまひ}・所^{いたはるゝころ}・勞^{なやむところ}・所^{シンシン}・悩^{シンセイ}・心^{ケンコシシタイ}・性^{コタイ}・言語進退^{オンシキ}・五体^{ゴタイ}・飲食^{オンシキ}などである。

①尋常は「今日向夜訪大第言 所悩不復尋常者」(二P108)、②例は「余兩三日心神復例」(三P159)、③平生は「若御御平生御覽遠近物歟」(二P456)、④常儀は「昨日酉刻許発 未時刻復常儀 昨日頗宜発御」(二P313)のように、四つの語の間には使用上の差異が認められない。従って、用例数——尋常16例・例24例・平生1例・常儀1例——から見て、本文献の記者は②例を最もよく用いたと考えられる。

次に、上記の四つの語(尋常・例・平生・常儀)に共通して用いられている表現の類型は、①尋常が「摂政御心地復尋常」(二P99)、②例が「頭中将資平伝勅云 御目無可復例之期 嘆息無隙」(二P1)、③平生が「若復御平生御覽遠近物歟」(二P456)、④常儀(つねのキ)が「昨日酉刻許発御 未時刻復常儀」(二P313)のように、「復〜」(〜にフクす)である。

又、①尋常と②例の二つの語に共通して見られる他の表現の類型は、①尋常が「昨発悩後 如尋常」(一P275)、②例が「御日如例」(一P456)「入夜中将来云 初參禪室 太危 息坐 乍臥有行 穢 而心神如例云々」(三P147)のように、「如〜」(〜のことし)である。

又、上記の二つの語に共通して見られる他の類型は、①尋常が「弥有平復之氣 飲食雖不快 不異尋常者」(二P3)、②例が「今日問日頗得尋常 但病体異例 已不可存」(一P277)のように、「異〜」(〜にことなり)である。

四 ま と め

1 本文献における病氣・怪我に関する表現に見られる異なり語は、名詞(相当語)が和語51語・字音語57語、動詞(相当語)が和語73語・字音語29語、形容詞(相当語)が和語22語・形容動詞(相当語)が和語2語・字音語12語であり、異なり語の総数は和語148

語・字音語98語、併せて246語である。

2 一文における主語と述語、目的語と述語、修飾語と述語、補語と述語などに用いられている単語の観点から、次の3点が言える。

- (1) 風病・痢病は発動と、飲食は不受^{うけず}と、それぞれよく一緒に用いられている。
 - (2) 形容詞熱^{あつし}は、身を主語としてよく一緒に用いられている。
 - (3) 形容動詞(相当語)では、不審^{あきらかならず}は目と、不穩^{めたやかならず}は行歩^{ききう}と、述語と主語の関係においてそれぞれよく一緒に用いられている。
- 又、不覚^{ふかく}は悩^{なやむ}の修飾語としてよく一緒に用いられている。

3 注意される表現は、同様の意味を示す動詞(相当語)として、次の3群がある。

- (1) 発^{おこ}・発動^{はつどう}・発起^{はつぎ}の3語。
- (2) 勞^{いたはる}・悩^{なやむ}・煩^{わづらふ}・病^{やむ}・有病^{やまりあり}・有恙^{つつかり}の6種類。
- (3) 平復^{へいふく}・復^{ふく}・平^{へい}・平愈^{へいよ}・減平^{けんへい}・平損^{へいそん}・平減^{へいけん}・減^{へん}の8語。

又、同様の意味を示す名詞(相当語)としては、尋常・例・平生・常儀の4語が用いられている。

以上、いずれの群においても使用上の差異は認められず、それらの内のどれを用いるかは本文の記者の好みであると言える。すなわち、(1)群は発、(2)群は勞、(3)群は平復、名詞(相当語)は例が、それぞれ最も多用されている。

4 注意される表現の類型は次の3点である。

- (1) 上記3で述べた第2群の動詞(相当語)の中で、勞・悩・煩の3語に共通しているのは、①「所〜」(〜するところ)②「有所〜」(〜するところあり)である。
- (2) 第3群の動詞(相当語)の中で、平復・平・平愈・平減の4語に共通しているのは、③「有〜氣」(〜するけあり)であり、平復と平愈の2語に共通しているのは、④「得〜」(〜することう)である。
- (3) 名詞(相当語)で、尋常・例・平生・常儀の4語に共通しているのは、⑤「復〜」(〜にフクす)である。

又、尋常と例の2語に共通しているのは、⑥「従〜」(〜にしたかふ)⑦「如〜」(〜のことし)⑧「異〜」(〜にことなり)である。

『小右記』に見られる病氣・怪我に関する単語一覧

〔色〕 = 『色葉字類抄』、〔名〕 = 『観智院本類聚名義抄』

○ = 有、× = 無 〔名〕 = 『観智院本類聚名義抄』に載っている。

A 和語 (1) 名詞 (相当語)

	単語	読み方	〔色〕	用例数		単語	読み方	〔色〕	用例数	
1	{ 足 脚	あし	○	24	24	血	ち	○	5	
		あし	○	6	25	近目	ちかめ	×	1	
2	汗	あせ	○	2	26	恙	つつか	○	9	
3	腕	うて	×	[名]	1	27	常儀	つねのキ	×	1
4	面	おもて	○	17	28	手	て	○	3	
5	大指	おおゆび	×	1	29	手足	てあし	×	3	
6	瘡	かさ	○	32	30	惱気	なやましけ	×	50	
7	頭	かしら	○	8	31	悩	なやみ	○	50	
8	風	かせ	○	8	32	歯	は	○	3	
9	肩	かた	○	3	33	鼻	はな	○	1	
10	顔色	かほのいろ	×	3	34	腹	はら	○	8	
11	{ 疵 癰	きず	○	23	35	針	はり	○	2	
		きず	○	1	36	腫	はれ	×	1	
12	医師	くすし	×	1	37	腫物	はれもの	×	13	
13	薬	くすり	○	19	38	膝	ひざ	○	2	
14	口	くち	○	1	39	肘	ひじ	○	2	
15	頸	くび	○	2	40	隙	ひま	×	4	
16	心地	こころ	×	35	41	蛭	ひる	×	[名]	3
17	心	こころ	○	1	42	頬	ほほ	○	4	
18	腰	こし	○	19	43	眼	まなこ	○	1	
19	声	こゑ	×	[名]	3	44	身	み	○	23
20	咳病	しはふきやみ	×	4	45	胸	むね	○	36	
21	尻	しり	○	2	46	目	め	○	86	
22	筋	すぢ	○	1	47	股	もも	○	2	
23	背	せ	○	5	48	病	やまひ	○	176	

	単語	読み方	〔色〕	用例数		単語	読み方	〔色〕	用例数
49	腋	わき	○	1	51	癒病	わらはやみ	○	15
50	煩	わづらひ	×	1		癒病	わらはやみ	×	1
	患	わづらひ	×	1		計		730	

(2) 動詞 (相当語)

	単語	読み方	〔色〕	用例数		単語	読み方	〔色〕	用例数
1	喘	あへく	○	1	21	折	おる	○	1
2	勞	いたはる	○	26	22	乾	かはく	○	2
	所勞	いたはるところ	×	79	23	加	くはふ	○	2
	有所勞	いたはるところあり	×	131	24	切	きる	○	2
	所勞時	いたはるところはへり	×	3	25	打切	うちきる	×	1
3	痛	いたむ	○	2	26	喰	くらふ	○	3
	所痛	いたむところ	×	1	27	苦	くるしふ	○	3
4	愈	いゆ	○	4	28	苦吟	くるしひうめく	×	1
5	愈合	いえあゆ	×	2	29	氣上	けあかる	×	1
6	得	う	○	13	30	削	けつる	○	1
7	受	うく	○	6	31	叫	さけふ	○	2
8	打	うつ	○	5	32	鎮	しつむ	○	1
9	打破	うちやふる	×	6	33	沈	しつむ	○	2
10	移	うつる	○	2	34	咳	しはふく	×	2
11	吟	うめく	×	2	35	攻	せむ	○	1
12	吟苦	うめきくるしふ	×	1	36	損	そこなふ	○	2
13	発	おこる	○	62	37	打損	うちそこなふ	×	1
14	発悩	おこりなやむ	×	13	38	背	そむく	○	1
15	発煩	おこりわづらふ	×	8	39	憑	たのむ	○	4
16	衰老	おとろへおゆ	×	1	40	堪	たふ	○	3
17	衰疲	おとろへつかる	×	1	41	仆	たふる	○	1
18	衰瘦	おとろへやす	×	1	42	散	ちる	○	14
19	思悩	おもひなやむ	×	3	43	疲	つかる	○	1
20	及	およふ	○	1	44	突損	つきそこなふ	×	1

	単語	読み方	〔色〕	用例数		単語	読み方	〔色〕	用例数
45	突破	つきやふる	×	1	60	踏誤	ふみあやまる	×	1
46	取	とる	○	2	61	踏損	ふみそこなふ	×	1
47	悩 所悩 所悩	なやむ	○	126	62	踏立	ふみたつ	×	3
		なやむところ	×	26	63	振	ふるふ	○	1
		なやむところあり	×	4	64	倍 増	ます	○	13
48	悩吟	なやみうめく	×	2			ます	○	1
49	悩苦	なやみくるしふ	×	12	65	乱	みたる	○	4
50	悩煩	なやみわつらふ	×	21	66	見	みる	○	2
51	蹇	なゆ	×	1	67	催	もよほす	○	1
52	似	にる	×	16	68	休	やすむ	○	3
53	臨	のそむ	○	1	69	止	やむ	○	4
54	腫	はる	○	10	70	病	やむ	○	4
55	腫悩	はれなやむ	×	1	71	蘇	よみかへる	○	1
56	冷	ひゆ	○	3	72	煩 所煩 所煩	わつらふ	×〔名〕	54
57	冷	ひやす	×	1			わつらふところ	×	9
58	臥	ふす	×	12			わつらふところあり	×	14
59	臥煩	ふしわつらふ	×	1	73	煩惱	わつらひなやむ	×	1
計								784	

(3) 形容詞（相当語）

	単語	読み方	〔色〕	用例数		単語	読み方	〔色〕	用例数
1	赤	あかし	○	22	10	暗 昏	くらし	×〔名〕	5
2	明	あかし	○	2			くらし	○	1
3	熱	あつし	○	17	11	苦	くるし	×	5
4	遍	あまねし	○	1	12	不快 未快	こころよからす	×	18
5	危	あやふし	○	2			こころよからす	×	17
6	痛	いたし	○	12	13	高	たかし	○	3
7	重	おもし	○	108	14	無力	ちからなし	×	16
8	難	かたし	○	1	15	無恙	つつかなし	×	1
9	軽	かるし	○	5	16	悩	なやまし	×	22

	単語	読み方	〔色〕	用例数		単語	読み方	〔色〕	用例数
37	病痾	ヒヤウア	×	1	48	不例	フレイ	×	4
38	病苦	ヒヤウク	×	1	49	平生	ヘイセイ	×	1
39	病患	シヤウクワン	×	3	50	老屈	ラウクツ	○	2
40	病死	ヒヤウシ	×	1	51	老骨	ラウコツ	×	2
41	病者	ヒヤウシヤ	×	7	52	痾	リ	○	8
42	病人	ヒヤウニン	×	3	53	痾病	リヒヤウ	○	21
43	病悩	ヒヤウナウ	×	15	54	盤	リヤウ	×	10
44	病羸	ヒヤウルイ	×	1	55	例	レイ	○	24
45	風気	フウキ	×	1	56	療治	レウチ	○	8
46	風病	フヒヤウ	×	34	57	万死一生	ハンシイツシヤウ	×	7
47	不予	フヨ	×	4			計		428

(2) 動詞 (相当語)

	単語	読み方	〔色〕	用例数		単語	読み方	〔色〕	用例数
1	休息	キウソク	○	4	16	平復	ヘイフク	○	44
2	眩転	ケンテン	○	2	17	平愈	ヘイユ	○	15
3	苦悩	クナウ	○	4	18	発起	ホツキ	○	1
4	乖乱	クワイラン	×	3	19	落馬	ラクハ	×	1
5	乖和	クワイワ	×	1	20	屈	クツス	×	1
6	減平	ケンヘイ	×	6	21	減	ケンス	○	30
7	除愈	シヨユ	×	1	22	瀉	シヤス	×	7
8	振動	シントウ	×	1	23	称	シヨウス	○	31
9	蘇生	ソセイ	○	5	24	存	ソンス	○	2
10	湯治	タウチ	○	14	25	治	チス	×	4
11	調伏	テウフク	×	1	26	復	フクス	×	37
12	発動	ハツトウ	×	30	27	服	フクス	×	41
13	不調	フテウ	○	1	28	平	ヘイス	×	16
14	平減	ヘイケン	×	3	29	減	メツス	×	2
15	平損	ヘイソン	×	5			計		313

	単語	読み方	〔色〕	用例数		単語	読み方	〔色〕	用例数
17	不安	やすからす	×	1	21	如常	つねのことし	×	2
18	宜	よろし	○	128	22	無殊事	ことなることなし	×	11
19	難堪	たへかたし	○	21		殊事不測	ことなることおはさす	×	11
	難耐	たへかたし	×	1		無異	ことなる(こと)なし	×	2
20	如此	かくのことし	○	2			計		437

(4) 形容動詞 (相当語)

	単語	読み方	〔色〕	用例数		単語	読み方	〔色〕	用例数
1	不審	あきらかならす	×	2	2	不穩	おたやかならす	×	2
							計		4

B 字音語 (1) 名詞 (相当語)

	単語	読み方	〔色〕	用例数		単語	読み方	〔色〕	用例数
1	医療	イレウ	×	4	19	疾病	シツヘイ	○	1
2	疫	エキ	○	6	20	邪気	シヤケ	○	43
3	疫死	エキシ	×	2	21	邪霊	シヤリヤウ	×	1
4	疫癘	エキレイ	×	7	22	辛苦	シンク	○	3
5	飲食	オンシキ	×	12	23	尋常	シンシヤウ	○	16
6	加持	カチ	×	6	24	心神	シンシン	○	38
7	霍乱	クワ克蘭	○	9	25	心性	シンセイ	×	1
8	灸	キウ	×〔色〕	3	26	進退	シンタイ	○	5
9	気力	キリヨク	○	3	27	心労	シンラウ	○	3
10	苦痛	クツウ	○	2	28	寸白	スハク	○	9
11	験	ケム	○	1	29	赤痢	セキリ	×	5
12	言語	ケンコ	○	1	30	膳	セン	×	2
13	紅顔	コウカン	×	1	31	増減	ソウケン	×	6
14	時疫	シエキ	×	6	32	痔	チ	○	3
15	食	シキ	×〔名〕	2	33	治	チ	×	1
16	時行	シキヤウ	○	12	34	熱	ネツ	×	38
17	疫	シツ	×	4	35	熱物	ネツのもの	×	7
18	疾疫	シツエキ	×	1	36	濃汁	ノウシフ	×	1

(3) 形容動詞 (相当語)

	単語	読み方	〔色〕	用例数		単語	読み方	〔色〕	用例数
1	危急	キキフ	×	7	7	憔悴	セウスイ	○	5
2	急	キフ	×	1	8	微	ヒ	○	1
3	枯槁	コカウ	○	7	9	非常	ヒシヤウ	○	1
4	昏黒	コンコク	×	1	10	不覚	フカク	○	37
5	至急	シキフ	×	2	11	不便	フビン	○	3
6	尋常	シンシヤウ	○	27	12	疴弱	ワウシヤク	○	7
計								99	

(中国短期大学経営情報学科助教授)

前号要目

「児島の泊」 攷

「うたたね」の夢

兼好の恋愛観—女性の位置づけをめぐる—

新詩社の九州旅行と吉井勇

「奉教人の死」考

黒田三郎の詩における「影」の意味するもの

井上ひさしと平賀源内—「ブンとフン」を中心に—

石上 敏

『改正増補英語箋』(住田文庫蔵) 下巻の

増補語彙と薩摩辞書—「魚介」と「蟲」部門—

研究ノート

一茶秀句二十五句鑑賞

上村 敦之

書評・新刊紹介

赤羽 学著「芭蕉俳諧の精神拾遺」

重 敏

大友信一博士還暦記念論文集刊行会編

『辞書・外国資料による日本語研究』

小山 登久

三村晃功編「摘題和歌集」

稲田 利徳

井本農一・大谷篤蔵編「校本芭蕉全集」別巻・補遺篇

水戸 純子

真田信治・金沢裕之編「二十世紀初頭大阪口語の実態

大友 信一

—落語SPレコードを資料として—

瀬良 基樹

内田 収著「片手でおはえる／古文／重用単語190」

瀬良 基樹

平成三年度岡山大学言語国語国文学会発表要旨

『岡大国文論稿』(第十一号・第二十号) 分類目録